

アッツ島守備隊長

山崎大佐

教育問題プロジェクトチーム

今野茂雄 陸自69

はじめに

山崎保代大佐（以下、山崎）は、陸軍士官学校（25期）を卒業後、中隊長

大隊長を経て高田の歩兵聯隊長を歴任

しました。山崎がアッツ島守備隊長に

任ぜられたときは、54歳と高齢で群馬

県の中学校と農学校で軍事教官を務め

ており、第一線を退いていました。そ

の山崎がなぜアッツ島守備隊長に推薦

されたのか、山崎がなぜ引き受けたの

かについては定かではありません。

ただ山崎の人は、地味な性格で、

平素は寡黙な人です。そして三男の河

野保久（河野家に婿養子に入った）に

よると、「父は典型的な職業軍人とい

えます。とにかく真面目一本、生一本

な人間で、要するに、昔の軍人ですか

ら、北の涯でもどこでも行って、そこ

を死守せよ」と命令されれば、それを

実行する。職業軍人だから、いつで

もどこでも、とり乱さず、むしろ進ん

で死ねる訓練と修行は積んでいますわ

ね」と述べている。自分の生き方に打

算など考えない、まさに実直な武人と

言えます。



出典：ウィキペディア

作戦に至る経緯と作戦概要

昭和16年12月の大東亜戦争開戦後、順調に南方作戦は推移し、今後の作戦を具体化するため、17年2月20日から

作戦の柱島に停泊する戦艦大和に於いて、連合艦隊の図上演習が開かれました。この中でアリューシャン列島の

アッツ島から爆撃機による東京空襲が2度行われ、1度成功したと判定されました。これによりアリューシャン列

島からの米軍の空襲の可能性が認められました。また折も折、4月18日米空

母からB25爆撃機16機が発進し、東京・名古屋などを空襲しました。これが世に言うドーリットル空襲です。これにより図上演習の結果が現実のものとなりました。

米陸上爆撃機の東京空襲が動機となり、海軍がミッドウェイ作戦を陸軍に申し入れ、陸軍はこれを受け入れ、ミッドウェイ作戦とアリューシャン作戦を

同時に行うことになりました。

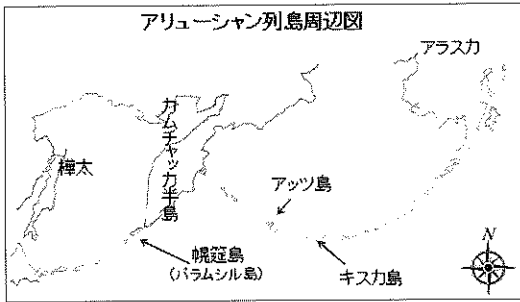
大本営は、アリューシャン作戦の作戦目的を、米軍の日本本土に対する進攻拠点を奪取することに決定しました。この後、陸軍は本作戦に必要な北

海支隊を派遣することにし、昭和17年6月7日、キスカ島、翌8日アッツ島に上陸させました。

地形

アッツ・キスカ島は、アラスカ半島の西端から西へ伸びる火山列島であるアリューシャン列島の西端にあります。

キスカ島は列島の西部にあつて、東西8km、南北40km、周囲80kmの島です。



アッツ島は、列島の西部、キスカ島の西方350kmにあつて、東西56km、南北32kmとキスカ島の2倍半の規模で「熱田島」と呼ばれていました。

気候は海洋性で気温は最低気温零下15度、夏の最高気温は15度と低い。夏と言えるのは7月・8月だけであとは

北海道の4月末頃の気候です。またアッツ・キスカ島は、濃霧、寒気、暴風等のため、3月～5月、9月・10月以外は大兵団の作戦は難しいと言われていました。

アッツ島守備隊長へ
昭和18年2月11日、北海守備隊の改編が発令され、キスカ島を第1地区隊、アッツ島を第2地区隊、占領予定のアドック島（アリューシャン列島中央部に位置する島）が第3地区隊になりました。同月16日、山崎は北海守備隊第2地区隊長に任命されて赴任することになりました。

3月末、山崎は北方軍司令官樋口季一郎中将（以下樋口という）に申告するため、北方軍司令部（札幌市）を訪れました。

山崎は、型通りの申告を終えた後に「このたびの新しい任務は、山崎の最後のご奉公と思います。閣下のご期待に沿うべく、全力を上げて重責を全うする覚悟でおります」と述べています。

当時既に敵しくなりつつあるアツツ島の行く末を見据えて、死んでも同島を守り抜く覚悟を示した発言といえま

山崎の家族への遺書

3月27日、山崎部隊長以下550余名、10センチ重砲その他の追送兵器と食糧を満載した3隻の輸送船団は、第5艦隊と第一水雷隊の9隻の護衛のもとにアツツ島へ出発しました。しかし、ベーリング海沖で米艦隊に遭遇したため、海戦の上、交戦を中止して、急遽幌艇に帰投することになりました。そこで山崎は、増援兵力、重砲、食糧もないまま、数名の指揮官、副官と共に伊31潜水艦に搭乗し4月18日にアツツ島へ着任しました。

山崎は、栄子夫人との間に二男二女をもうけています。上は高校から下は小学校と幼い子たちです。山崎は高田を出発するとき、既に家族への遺書を書いていきます。

夫人には

「栄子に遺す言葉

一、部隊の長として遠く不毛の地に入り骨を北海の戦野に埋む、真に本懐と存じ候。況や護国の神霊として悠久の大義に生く快なる哉

二、思ひ残すこと更になし、結婚以来茲に約30年、良く孝貞の道を尽す、内

助の功深く感謝す、子供には賢母、私には良妻、そして変わらざる愛人なりき、衷心満足す」

子供には

「母に孝養を尽くすことが父の霊に對する何よりの供養」などと書き残しています。飾り気のない率直な文章に山崎の人の柄が表れています。

米軍の上陸開始

5月12日早晩、戦艦3、空母1など36の艦艇と空軍に援護された兵力約2万の米歩兵第7師団が濃霧の中、アツツ島へ上陸を開始しました。

このとき待ち受けていた山崎以下のアツツ島守備隊の兵力は、歩兵1個大隊半、山砲1個中隊、高射砲12門、工兵1個小隊を基幹とする2638名(海軍約100名を含む)であり、米軍とは圧倒的な戦力上の差がありました。また既に制空権・制海権は米軍にありました。

以前から樋口は、アツツ島の守備隊の兵力が少ないと考えており、山崎に増援部隊を約束していました。

樋口は、アツツ島の山崎あてに「軍はあらたに有力な部隊をもって、上陸せる敵を撃滅すべく、着々準備を進めつつあり」の緊急電報を発信させました。

山崎が、その緊急電報を受け取った

のは米軍上陸後2日目の5月13日夜でした。

次いで5月16日、樋口は「北方軍は海軍と協力し、西部アリュウシヤン方面に對し大作戦を企図しつつあり。本作戦の成否は、かかつて貴部隊の善戦にあり、極力持久を策し、状況止むを得ざるも東浦沿岸要地を確保すべし」と命じています。

樋口が東浦沿岸要地を確保と命じたのは、増援部隊の足場と考えたからにほかなりません。

この電信は山崎を大きく勇気づけましたが、この頃戦況は悪化しており、東浦地区の確保は困難になっていました。

そのような厳しい状況下においても山崎の毎日の決心・処置と報告は的確でした。

増援部隊の出勤準備が完了した5月20日になって大本営から樋口のもとにアツツ島救援作戦中止が伝えられました。その理由は、当時海軍は、ガダルカナル、ニューギニア方面の作戦による艦艇、輸送船、航空兵力の消耗が激しく、アリュウシヤン作戦に割ける余力がなくなり、海軍の協力を得られなかつたからでした。こうしてアツツ島増援作戦は打ち切られることになり、アツツ島は孤立状態に陥りました。

5月21日、北方軍からの電報がアツ

ツ島へ発信されました。

「中央統帥部の決定にて、本官の切望せる救援作戦は現下の情勢では不可能となれり、との結論に達せり。本官の力およびざることを、まことに遺憾にたえず、深く陳謝す」

これに對する返電は22日夕刻樋口に届きます。

「戦さする身、生死はもとより問題ではない。守地よりの撤退、將兵の望むところではない。戦局全般のため、重要拠点たるこの島を、力およびずして敵手に委ねるにいたるとすれば、罪は万死に値すべし。今後、戦闘方針を持久より決戦に転換し、なし得る限りの損害を敵に与え、九牛の一毛(きわめてささいで取るに足りない)ながら、戦争遂行に寄与せんとす。なお爾後報告は戦況より敵の戦法、およびこれが対策に重点をおく。もし将来この種の戦闘の教訓として、いささかでもお役に立てば望外の幸せである。その期いたらば、將兵一丸となつて死地につき、靈魂は永く祖国を守ることを信ぜし」との電文でした。通常の人間ならば、増援部隊を約束しておきながら破るとは、と詰問するところですが、文面は極めて謙虚、悲壯であり、しかも自軍の最後までの方針と今後の作戦に寄与する教訓を得る内容を述べており、この電報を受けた北方軍作戦室で

は肅として声なく、嗚咽おなげが聞こえたといひます。

この時樋口は、「今後は戦況より戦法に重点をおいて報告し、爾後の島嶼戦の教訓にされたし！」これは深く死を覚悟し、また冷静沈着の境地に達しなければできないことである(惜しい人材を失うことになってしまった……)かしておきたい人物だったのに……と慨嘆しています。

5月29日の山崎大佐からの最後の電報「全戦線を通じ、戦鬪をし得る者僅か500名となった。本夜、夜暗に乘じ全員敵中に突入する考えである。私どもは国家民族の不滅を信じ、散華するであろう。閣下の武運長久を祈る。各位に宜しく伝達ありたし、天皇陛下万歳、これとともに通信機を破壊する」山崎は最後の電報後、突撃を行いました。米攻略軍の中隊長が語っています。

「霧がたれこめ、百メートル先が見えない。ふと異様な物音がひびく。すわ敵襲と思つてすかしてみると、3、4百名が一団となつて近づいてくる。先頭に立っているのが山崎部隊長だろ。右手に日本刀、左手に日の丸をもっている。……わが1弾が命中したのか、先頭の部隊長がバタリと倒れた。しばらくすると、むつくりと起き上がり、

また倒れる。また起き上がり、じりじりはうように、米軍に迫ってくる。……ついにわが砲火が集中された」と突撃場面を詳しく述べており、山崎の武人としての最後の生き様が分かります。

おわりに

大東亜戦争開戦後、日本軍は破竹の勢いで占領地域を拡大する中、今後の戦いを考慮したミッドウエー作戦・アリューシャン作戦を実行しました。しかし、このミッドウエー作戦において海軍が大敗した後は、米軍の反攻が予想以上早まり、陸軍の方針は海軍の影響を受け、ぶれていきました。アリューシャン列島の一角に位置し、いわば孤島を守るアッツ島の作戦は、部隊の増援、物資の補給は必須でした。しかし、昭和18年5月の米軍上陸開始のはるか以前からその望みは絶たれていました。山崎は、樋口への申告時の挨拶、家族への遺言にみるとおり、死を覚悟して守備隊長として着任しました。5月12日の米軍上陸以来29日夜の突撃までの間、大本営の方針変更にも拘わらず、一兵の増援を要求することなく、たんと任務を完遂した稀に見る武人といえます。

このアッツ島の戦いの結果、日本の陸軍側戦死2527人、生還者26人、海軍側戦死111人、生還者1人(公

刊戦史)となつています。生存率は約1%でした。このときから「玉砕」と言う言葉が使われています。

なお、昭和18年9月29日、札幌市の中の島公園を斎場としてアッツ島守備隊將兵2600余柱の合同慰霊祭が行われました。

祭壇には、遺骨のない2600余柱の白木の箱が並んでいたといひます。

戦後、これまでにアッツ島で行つた遺骨収集は2回のみ、戻つた遺骨は僅かに320柱といひます。国の大事に殉じた山崎以下將兵の遺骨の大部分が、今日なお酷寒の北海の島に埋もれています。厳しい気象条件等事情があつたにせよ、大変残念な状況です。ご遺族はもとより多くの方が一刻も早いご遺骨の帰国と祖国での慰霊を強く待ち望んでいるのではないでしょう

か。

最後に、昭和18年に作られた「アッツ島血戦勇士顕彰国民歌」を見ると歌詞には、当時の厳しい状況を歌い上げています。

参考までに一部を付記します。

一、刃も凍る北海の

御楯と立ちて二千余士
精銳こぞるアッツ島

山崎大佐 指揮をとる
山崎大佐 指揮をとる

三、陸海敵の猛攻に
我が反撃は火を吐けど
巨弾は落ちて地をえぐり

山容ために改まる
山容ために改まる

八、残れる勇士百有余
遙かに皇居伏し拝み

敢然鬪と諸共に
敵主力へと玉砕す
敵主力へと玉砕す

【参考文献】

- ・ 樋口泰浩『アッツ島とキスカ島の戦い』
- ・ 牛島秀彦『アッツ島玉砕戦』
- ・ 西島照男『アッツ島玉砕 一九日間の記録』
- ・ 『歴史街道』編集部編『断固反撃せよ』知られざる戦記
- ・ 佐藤和正『玉砕の島』
- ・ 相良俊輔『流水の海』
- ・ 早坂隆『指揮官の決断』
- ・ 林三郎『太平洋戦争陸戦概史』
- ・ 服部卓四郎『大東亜戦争全史』
- ・ 読売新聞 令和元年8月17日付

